

教員養成課程学生に対する SDGs 教育の実践（その2）

梶 崎 久美子*

(2022年11月30日 受理)

Practice of Education for SDGs For Students in the Teacher Training Course (2)

Kumiko NARAZAKI*

Keywords: SDGs 持続可能な開発目標, ESD 持続可能な開発のための教育, students in the Teacher Training Course 教員養成課程学生

1. はじめに

本報告は2020年度及び2022年度に広島女学院大学で行った教員養成課程の学生を対象としたSDGs教育の実践に関するものである。

2019年度に実施した教員養成課程の学生に対するSDGs教育の取り組み^{注1)}を継続し、家庭科教員養成課程に関わる著者が課外で勉強会を行うことで、教職科目や教科科目の枠を超えた学びを学生に提供することを目的としている。

2. 2020年度教職課程勉強会（SDGs 研修会）

2020年度教職課程勉強会（SDGs 研修会）は、2020年12月2日15時30分～16時30分で行った（図1）。コロナ禍での集会であったため、感染拡大防止対策を講じた上で実施した。企画のきっかけは、高校時代に生徒会に所属

し、SDGsに関わる活動をしていた本学学生Aさん（仮名）が著者の本取り組みを知り、ぜひ教職課程学生へプレゼンを行いたいという申し出を受けたことからである。よって、当日はまず、著者からSDGsについての説明、家庭科の位置づけ、家庭科とESDについて30分ほど講義したのち、Aさんに高校での取り組みについて15分のプレゼンテーションをしてもらった。その後、意見交流の時間を取り、教科教育だけでなく、生徒会のような課外の指導などがかかわる可能性も示唆しながら、Aさんへの質疑応答や考えたことの共有の時間とした。当日の対面での参加者は本学の家庭科の教員養成課程学生10名であった。また、コロナ禍であったため、参加を見送った学生がいたことを考慮して、Aさんと参加学生の許可を得て動画を撮影し、中高家庭科教職課程のGoogleクラスルーム^{注2)}から期間限定で配信した。視聴回数を確認したところ、5回であったことから、少なくとも5名程度がオンライン参加をしていることが見て取れる。

実施にあたり、参加者には事前、事後のアンケートをお願いしたところ、以下の回答があった^{注3)}。

まず、事前アンケートでは11名の学生が回答した。内訳は表1の通りである^{注4)}。SDGsという言葉の認知度に

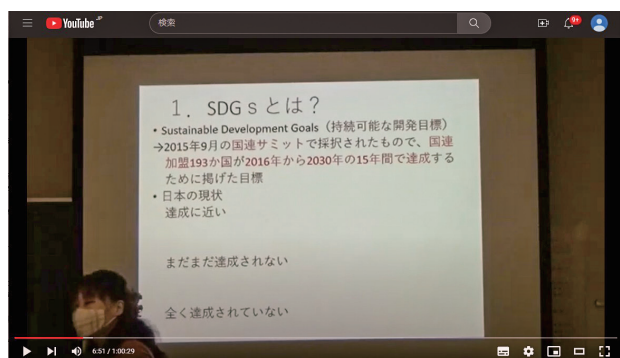


図1 SDGs 研修会の様子（配信動画の一場面）
（2020年12月2日 著者撮影）

表1 2020年度事前アンケート回答者内訳（人）
（アンケートをもとに著者作成）

学科／学年	4年	3年	2年
生活デザイン学科	3	6	0
管理栄養学科	1		1

* 広島女学院大学人間生活学部生活デザイン学科准教授

については全員が知っている」と答えたが、説明できるか、と尋ねたところ、「ある程度できる」27%、「あまり自信がない」46%、「まったく自信がない」27%であった。わかる範囲で説明するよう記述させたところ、文字数としては、最少4文字、最多145文字、平均31.1文字であった。家庭科とSDGsの関連についての認識を尋ねたところ、図2の通りであった。この結果から何らかのかかわりを見出していることがわかった。具体的にどのような分野や内容が関わっているかを記述させたところ、衣食住の生活や環境、消費など特定の分野を上げる学生もいたが、「環境が中心だが、どの分野にもつながると思う」「環境や、食に関する事柄は自分の身の回りだけでなく、地球規模で考える事柄であることを表しているため、とても関連していると思います。」などと表現し、SDGsが家庭科の内容に網羅的にかかわっていることを認識している学生が半数みられた。

家庭科とSDGsの関連の認識 (N = 11)

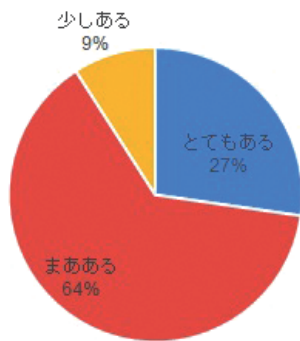


図2 家庭科とSDGsの関連についての認識
(アンケートをもとに著者作成)

次に事後アンケートでは、8名の学生が回答した。内訳は表2の通りである。研修会に参加して、SDGsについての理解が深まったかどうかを尋ねたところ、「とても深まった」63%、「まあ深まった」38%であった。SDGsについて説明の自信を尋ねたところ、「しっかりできる」12%、「まあできる」88%であった。SDGsについて説明するよう記述させたところ、最少37文字、最多202文字、平均76.4文字と事前の調査より2倍以上増えた。事前・事後アンケートをどちらも回答した学生のみを比較する

表2 2020年度事後アンケート回答者内訳 (人)
(アンケートをもとに著者作成)

学科／学年	4年	3年	2年
生活デザイン学科	3	3	0
管理栄養学科	2	0	0

と平均2.4倍も文字数が増え、最も文字数が増えた学生で3倍近くの説明文を書くことができた。また、感想や今後の自身の生活にどのように活かしていきたいか、という記述については、日本のSDGsの達成度に危機感を覚えながらも、自身の生活においては、おおむね前向きの捉える姿勢が見られ、「(前略) 今回のお話はとても為になり、自分1人でできることと誰かと協力しなければ目標に近づけることができないこともあると改めて認識できた。(中略) 身近なことだと自分にも責任があると思えたのは、発表がわかりやすく工夫されていたからだと思った。私は、教員として働こうと思っている為、SDGsについて生徒に伝える際、どのように伝えたら自分自身に関わっていると感じ、行動を変えなくてはいけないと思ってもらえるのか、地球のためにと考えてもらえるのかを改めて考える必要があると学んだ。(後略)」と詳細な感想を書く学生も見られた。また、「自分が知識を持っていないといけませんが、他の人と協力し専門の人をゲストスピーカーとして呼び出すなど様々な手段があると思った。教員になったら1人で抱え込まず、誰かに相談しながら学校全体で考えていきたい内容だと思った。」という、協働の姿勢、まさにパートナーシップでの目標達成の意識が芽生えたことが確認された。

これらの結果から、単なる用語の解説や取り組みの紹介だけでなく、同じ大学生が高校時代に行った取り組みを知ることは、学生の意識の変化にかなり影響があり、また、それを陰で支えた高校教員についても意識させたことで、教員養成課程の学生として、自分が就職する際の参考にもなったかと思われる。

3. 2022年度 SDGs 学習会

この企画は2022年5月28日13時～15時に行った(図3)。内容は、イマココラボ運営事務局より派遣された大谷優



図3 SDGs学習会の様子(2022年5月28日著者撮影)

子講師をファシリテーターとしてお迎えし、一般社団法人イマココラボが作成したカードゲーム「2030SDGs」^{注5)}を使用して、SDGsについて知るというものである^{注6)}。SDGsという言葉の認知度は浸透してきたものの、実際に行動に移す、という点ではやはり自身で考え、動くという体験的な活動が有用であることは2019年度の報告から明らかとなっている。そこでゲーム形式の内容に加え、多様な考え方、視点を獲得させるために、教員免許取得者だけでなく、全学の学生に参加を呼び掛けた。その結果、当日の参加者は14名で、教職課程以外の学生の参加もあった。

事前アンケートには17名の回答があった。内訳は表3の通りである。SDGsという言葉の認知度は94%が「今回の学習会以前から知っていた」と答え、それらの学生にいつ知ったのかを尋ねたところ、「大学入学以前」69%、「大学入学後」19%、「覚えていない」12%という結果となった。「大学入学以前」に知った学生のうち、「学校」で初めて触れたと回答したのは90.9%で、SDGsが高校までの教育機関で取り上げられ、何かしらの形で触れられていることが明らかとなった（表4）。なお、この学習会は先にも書いた通り、全学に向けて参加者を募集したため、参加動機を確認したところ表5のようになった。ゲームそのものは各教科教育に直接的に関わるものではないが、教職課程委員をしている著者の呼びかけが影響したのか、全体の76%に当たる学生が教員になったときのことを意識した参加動機であることがわかった。また、現段階でSDGsについて知っていること

や考えていることについて記述させたところ、SDGsの用語的な回答をしたもの、SDGsの広まりについて思いを書いたもの、17の開発目標の一部に特化して解答するものなどに分類できた。「持続可能な開発目標、SDGsという言葉はよく聞くけれどあまり詳しくは知らないです。」と正直に書く学生もおり、関心はあっても詳細を知るまでに至っていない、という傾向がみられた。

次に事後アンケートでは、11名の学生が回答した。内訳は表6のようになった。学習会に参加したことで、SDGsについて説明する自信があるかについて尋ねたところ、「しっかり説明できる」9%、「まあ説明できる」91%であった。可能な範囲で説明するよう記述させたところ、最少9文字、最多141文字、平均63.6文字であった。事前アンケートでは、知っていることや考えていることと聞いたために純粹に比較することは難しいが、用語について書いていた学生の文字数を見ると^{注7)}最少9文字、最多119文字、平均39.8文字であったことからこれまで同様、学習を経て学生の中に知識が入り、また伝えようとする意識が成長していると考えられる。

また、今回の学習会では学年や学科ができるだけ同じにならないようチームを作り、ゲームに取り組ませた。ほとんど初めて会うチームメイトと意見を交わし、また、他チームと交渉を行って目標を達成しなくてはならない状況であり、さらに、コロナ禍でグループワークがしばらく制限されていたという背景もある中で、本学が学生たちに身に付けさせたい「伝える力」^{注8)}を活用する

表3 2022年度事前アンケート回答者内訳（人）
（アンケートをもとに著者作成）

学科／学年	4年	3年	2年	1年
生活デザイン学科	1	1	1	3
管理栄養学科	0	0	2	3
児童教育学科	1	0	0	0
日本文化学科	0	1	0	4

表4 SDGsを知ったきっかけ
（アンケートをもとに著者作成）

時期／媒体	学校	課題	テレビ番組	塾・市民講座 など学外の授業、セミナー	家族
覚えていない	1	0	0	0	1
大学入学以前	9	1	0	1	0
大学入学後	2	0	1	0	0

表5 参加動機（アンケートをもとに著者作成）

動機	人数
教員になったときに役立ちそうだから	13
以前からSDGsに関心があったから	5
以前SDGsに関わる活動をしたことがあったから	3
一般企業への就職に役立ちそうだから	3
先輩・教員に勧められたから	3
友人・知人に誘われたから	3

表6 2022年度事後アンケート回答者内訳（人）
（アンケート回答者内訳）

学科／学年	4年	3年	2年	1年
生活デザイン学科	1	1	1	2
管理栄養学科	0	0	0	2
児童教育学科	1	0	0	0
日本文化学科	0	0	0	3

ことができたかを問うために、交渉の場面において、今持っている「伝える力」を活用できたかどうか尋ねた。「しっかり活用できた（主体的に話しかけた、話しかけられたことに積極的に応えた）」7名、「まあ活用できた（ペアの人と一緒に話しかけた、話しかけられたことに2回に1回は応えた）」4名と前向きに取り組んだ様子が明らかとなった。学年による影響はあまり見られず、こういった会に参加し、また、事後アンケートにもきちんと答えてくれる学生であるからその結果ともいえる。具体的に学習会を通して「伝える力」について考えたことを尋ねたところ、初対面の相手との意思疎通に戸惑ったり、ただ、意見を言うだけでなく、チームとして意見をまとめていくこと、自分に優位に交渉を進める難しさを訴えたりという内容が多かったが、「（前略）「どう思う？」の一言で深い話が出来たり、考えが思いつかない時に具体的に指摘して問いかけたりと、聞く側にもテクニックが必要だと思いました。また、相手が何を求めているのかも把握し互いに納得できるように交渉することが難しく、よく聞くことも、大切だと思います。」という課題を自分で見つけた意見もあり、学習会が学生にとって有益な気づきを得る機会であったことが確認された。また、学習会を通して、SDGsについて考えたことを記述させたところ、「（前略）どんなことでも世界に影響を与えるということがよく分かったので、何か一つでも小さなことから環境のことを考えて生活しようと思いました。」、「（前略）SNSで情報を拡散したり、おにぎりアクションに参加したりなど誰でも身近にできる簡単な取り組みもあり、自分にも出来ることがあるのだと知ることが出来た。今後はこういった活動に参加してみたいと思った。」など、意識の変革があったことを示すものが大半であった。また、「今まで高校の時にさりと触れる程度だったけれど今回の学習会でしっかりと学ぶことが出来ました。（後略）」という、高校で学んだことと比較した振り返りを書いた学生もあり、高校までの教育現場で必ずしも多くの時間を取っているわけではないことが伺えた。学習会を通して、これからどのように役立てたいと思うかについて記述させたところ、「私はまず、「勿体ない」を無くすところから始めたいです。自分自身が資源を大切にする姿をみせ、子どもたちにもその心を持って貰えるような関わりに繋げて行けたらと思います。」、「今回の学習会には、先輩方もおり、言葉一つ一つが上手で私もそのような人になりたいと思ったので、まずは積極的に自分の思ったことを発信していきたいです。」「交渉の時に頑張った経験や初めて会う先輩方とも話せるように頑張った経験をこれからの就職活動や初めて会う人と話

す時に役立てて行きたい。」など、暮らし方や考え方などに言及しているものが多く、SDGsを体験的に知ること、具体的な行動に移すきっかけとなる様子が伺えた。

4. まとめ

2020年度と2022年度に行った本取り組みを振り返ると、身近な学生による体験談や身近な例を多く取り上げた解説を通して、参加した学生達がSDGsに関心、危機感、親近感、使命感を持ち、また教員養成課程の学生の場合は、教員として現場に立った時のことまで想定しながら学びを深めている様子が明らかとなった。コロナ禍により、継続的に会を開催することができなかったが、今後も体験的な活動を通して知識を届け、また、考えたことの交流、取り組んだことの発表などの機会を増やすことで、学生自身の持続可能な社会の構築を担おうとする意識や行動のきっかけ、また教育現場でも応用できる学びになると思われる。

今後の課題としては、継続的に参加できる環境づくりに着手し、学習会での学びの積み重ねの効果を検証したいと考える。学習会直後の事後アンケートでは、前向きな意見を書くことはおおそ想定されるが、時間が経っても学習会の経験や意識が教職課程の学びに活かされているのかどうかを明らかにしたい。

最後に、これらの学習会に参加し、研究に協力してくれた学生の皆さん、また実施にあたってご協力くださった教職員の皆様に御礼を申し上げます。ありがとうございました。

注

- 1) 拙著「教員養成課程学生に対するSDGs教育の実践」(『広島女学院大学紀要』8号 pp. 85-90)を参照されたい。
- 2) 広島女学院大学ではコロナ禍における遠隔授業のツールとしてGoogle クラスルームを使用していた。このツールは任意のクラスが作成できるため、それまで対面で教授していた情報や模擬授業の実施が制限されたため、中高家庭科教員免許を取得する学生を対象とし、著者が主催するクラスルームを作り、運営を行った。今回配信を行ったのもそのクラスからである。なお、クラスルームへの参加は学生の任意である。
- 3) Google フォームを使用し、回答に際しては、メールアドレスを収集すること、回答は任意であることを記載したうえで、1問目に回答を研究及び広報に使用してもよいか尋ねた。今回の報告の結果は研究での使用を許可した学生の回答のみを使って分析している。
- 4) 生活デザイン学科は2018年度に改組を行い、この時点の

4 年生は2017年度生の為、実際には生活デザイン・建築学科に所属しているが、本調査では現行の生活デザイン学科でまとめる。

5) ゲームの詳細については注 1 でまとめている。

6) なお、この講師招聘にあたっては「広島県温暖化対策活動促進補助金メニュー事業」の「【SDGs 体験】で始める 2050 ひろしま ネット・ゼロカーボン宣言」事業に伴う【令和 4 年度広島県温暖化対策活動促進補助金】の助成を受けて行なった。

7) 記述の中から意見にあたる部分を除き、客観的事実のみ書いているものを抽出した。

8) 「伝える力」とは現在本学が全学的に取り組んでいる教育目標のようなものである。単に人前で発表するというような能力だけでなく、レポートなどによる文章での「伝える力」や、相手の伝えたいことを聞こうとしているという態度を示す「伝える力」など複合的なコミュニケーション能力やプレゼンテーション能力を指している。